

# 父系の指・母系の唇

——松本清張の原形質をもとめて——

## 一 峯太郎と清張

「全集」という形態は、特定の著作者の作品を一覧する便宜ではあるが、同一規格のなかに押し込められて、初出ないし単行本にあったさまざまな情報やメッセージを失うことが少なくない。さきに本誌において、谷崎潤一郎が自らの著述の奥付に施す「検印」に、その時々々の谷崎の文学生活が密接にかかわり合うことを通覧したことがあつた。<sup>注1</sup>これは、もちろん実際に単行本の奥付にあたってみなければ気づかない問題だった。「全集」の類が便宜以外のなものでないことを示してあまりある事実である。コレクターのフェティシズムとはまったく別個に、研究という場に

において初出・単行本などに回帰する必要に迫られる場合なしとしない。

松本清張のような、単行本が量産された「流行作家」にあっても、事情は右の一般論とほとんど同じ事がいえると思う。その一例に、一九七〇年一二月に文藝春秋から刊行された『史観・宰相論』がある。該書は、その書名の示すとおり、大久保利通から吉田茂までの近代日本の政治主導者たちの群像を描く政治史論である。四六判ハードカバー函装で刊行されたそれには、見返し紙の次の、いわゆるトビラの裏中央に、

——明治大正の政治談を好んだ亡父に捧ぐ

横 井 孝

という献辞がある。この献辞なるもの、近年はほとんど見かけないし、もともと目立たないものではあるが、著者の思い入れの一端として見過ごしがたいものの一つである。

『松本清張全集』にはもちろん記載されないし、所収の当該巻の解説にもふれるところはない。そもそも一部の作家——たとえば中原中也・宮澤賢治など——のそれを除いて、「全集」なるものの書誌情報は貧弱のひとつことに尽きるのが通例だ。

清張の父・峯太郎の没したのは一九六二年（昭和三七）三月。実に『史観・宰相論』が刊行される一八年前とということになる。『半生の記』<sup>注2</sup>に「父は政治記事に興味をもっていた。広島県の警察部長の書生のようなことをしていたころ、法律のことをかじっていた名残りかもしれない云々」という叙述と合わせ鏡にして、この献辞のもつ味わいもまたひとしお、ということができ。

後述するように、清張作品における「父」への思い——ひいては「父と子」の関係の物語は、初期から晩期にいたるまで通奏低音のように長い息をもって交響する。『半生の記』のような自叙伝、または清張みずから自伝的小説とみとめる『父系の指』などはもとよりだが、一見そのようにみえない作品にも「父と子の物語」を見出すことができるといふ。丸谷才一は、松本が長い雌伏の期間を経、上京

してはじめての家をかまえたのち、家族を東京に呼び寄せたころの記述を『半生の記』にもとめ、「東京の各地に興味をもち……無断でひとりで出歩いていた」といふ、清張の描く父親の姿に敷衍して、

この「どこまでも楽道家」である父が、八十歳を越えてみながら一人で勝手に東京見物に出歩く姿はまことに楽しい。そこには……単に息子の努力によつて生活が安定しただけでなく、自分のおそらく終生の念願であつたにちがひない東京への移住がかなつたといふ、<sup>注3</sup>老年の幸福がはつきりと示されてゐるからである。

——という。丸谷の筆も、この父と子の関係にはやさしい。そして、丸谷は「松本の資質には父から受けついだもののがかなり色濃い」と評し、戦後まもなく、松本が箒の行商をしながら觀光地に寄り道したとと老父の東京見物とを対比し、「親子二代にわたる地理と歴史への愛着」を見いだし、「時間をさかのぼるために空間を歩きまはる、生命力の旺盛な家系」と捉える。後年、松本が毎年のように海外に取材旅行をするようになったのが五〇代なかば以降（最後の海外旅行は平成元年、八〇歳の時）であることを思い合わせれば、そこには「旺盛」な好奇心と「生命力」とを

感じざるをえない。

さらに丸谷は、『平生の記』による事実関係の把握にとどまらず、「当時の松本の無意識の世界へと降りて行」くことよって、自伝以外の作品にも「父と子の物語」を見いだすことができるという。丸谷の想像では、松本が父の東京見物を喜び、「父子二人での、地理趣味、歴史趣味の旅を夢みてゐた」、しかしその一方で、当時駆け出しの新進作家である彼にとつて、生活を支えるために旅行に連れゆくわけにいかない現実がある。しかもその「夢」自体、松本の意識の表面に浮かばなかったかもしれない。だからこそ、「その夢は小説のなかで実現された」——というのである。

『点と線』およびその姉妹篇『時間の習俗』は、若二人の警察官の協力の物語である。このとき、福岡署の、「着ているオーバーがくたくただったように、洋服もくたびれてい」て、「使いふるしたネクタイが燃れている」「四十七八の、痩せた風采のあがらぬ」「鳥居重太郎という古参の中年の刑事」が父であり、そして、「三十をいくつも出ていない」「背は高くないが、がっしりした体格で、なんとなく箱を連想させ」「だが、顔は血色のいい童顔で、濃い眉毛とまるっこ

い目をもつてい」る、警視庁捜査二課の警部補、三原紀一が息子に当ることはいふまでもない。戦後日本の最も高名な推理小説は父と子の物語なのである。

ただ、右のような指摘は、丸谷自身が「当時の松本の無意識の世界へと降りて行つ」た結果であり、「ひよつとすると意識の表面に浮かばなかったかもしれない夢」というように、当否の判別のつけにくい問題ではあるだろう。しかし、にもかかわらず——というか、であるからこそ、とうべきか、『点と線』『時間の習俗』への「父と子の物語」の見立ては卓見と評さざるをえない。父と子の連帯は、松本清張その人にとって重大である以上に、作品群における父系へのまなざしは、太い地下茎をなして、彼の作家生活の全体をつらぬいて見えるからである。

## 二 「父」への回路

『平生の記』には、父峯太郎の出生について、このように記している。

父は生まれるとすぐ事情があつて、他家へ養子にやられた。父の実母は妊娠したまま一時、離縁になつた

のである。父が養子にやられたのは、そのためだろうが、そのへんのくわしい事情は分らない。何か暗い気持がする。  
(34巻・五頁)

峯太郎の母親は同郡霞というところにある福田家から来ていた。ここで長男峯太郎を産んだのだが、いかなる理由からか、母親は田中家から一時離縁されている。そして峯太郎を松本家に養子に出したあと復縁し、つづいて二人の男子を産んでいる。この分らない理由に想像をつけなければいろいろ考えられるところだ。

米子に貰われていった峯太郎が、子供のころ、矢戸の実家にたびたび帰っていたことは、前記の峯太郎の従兄に当る田中老人の言葉の通りである。「小学校のころにはよく遊びに来よつたが、それから、いつの間にか来んようになった」のである。それは田中家のほうで峯太郎を忌避したのか、あるいは子供心にも峯太郎が暗い出生の事情を察して足を踏み入れなくなったのか、その辺のところも分らない。  
(同・六頁)

この、しきりと詮索したがる意識は、ことが「父」の出自にかかわるものであるためなのか、親族の血に対する興味なのか、あるいはその双方なのか、清張自身にも判別

つかぬ問題であろうが、彼の作品群に深く根を下ろしている。私小説を嫌った松本だが、みずから「私小説らしいといえ、これが一ばんそれに近い」という『父系の指』には、「私の父と田中家との関係をほとんど事実のままこれを書いておいた」という。

『父系の指』は一九五五年(昭和三〇年)九月号の『新潮』に掲載されたごく初期の作品(芥川賞受賞が一九五三年)。その概要はつぎのようなものである。

——「私」の父は伯耆の山村に生まれた。幼くして里子に出されたが、やや長じて故郷を出奔し、学歴のないこともあり職を転々としたが、どれもまともにならなかった。幼い「私」をつかまえては「今にのう、金を儲けたら矢戸に連れて行ってやるぞい」という。「私」が成長し、父の故郷矢戸へ行ってみると、一族みな栄達し、父のみが忘れられている。父の弟の家を訪れると、一族はみな歓待してくれた。叔父の子Ⅱ従弟がリングゴの皮をむいているのをふと見ると、その指に肉親の血を感じ、父系の指への嫌悪の情が起るのを「私」は押さえられなかった。——

『全集』第三五巻(文藝春秋、一九七二年七月刊)の「あとがき」には、同巻所収の小説の一篇ごとにコメントを付しており、この一篇については「自伝的なもの、もっとも濃い小説」であると自認し、「小説は自分をナマ

のかたちで出すべきでない」という持論から「この小説でも全体の半分ぐらゐは事実だが、半分は虚構」(五二六頁)という。『転変』(一九五四年)、『情死傍観』(同)、『柳生一族』(一九五五年)など「出来のいいものとは思っていない」作品をふくめたいくつかとともに、かなりそつけない叙述ではあるのだが、その印象に反して、「父」への叙述は『半生の記』の証言とそっくり対応する。

一体に、松本には、「自分をナマのかたちで出すべきでない」という頑固なまでの意志があり、それを公言しつづけていた。後年の三好行雄との対談でも「小説はフィクションが本道だと思う。私小説で訴えるものをフィクションで効果的に訴えるなら、自己の乏しい経験の告白よりも<sup>注4</sup>ずつと効果がある」といつていたし、また別の対談でも、

私は、小説というのはフィクションという名前に表されているように、あくまでもつくりごとでなければならぬと思うんだ。つくりごとの世界に、自分の主張なり、自分の人生観なり、ものの考え方が入っている、それが小説だと思うんだ。

ところが私小説が入ってきてからは、つくりごとが極力排斥されて、物語があつてはいかんといいんだ。そして、小説が面白くては通俗になるといいんだ。

じゃ、残ったものは何かというと、随筆か小説かわからないような身辺雑記です。<sup>注5</sup>

と強調する。彼の主張は初期から一貫していて、微動だにしない。松本の文学観の基底をなすものであり、彼の小説観の根幹といふべきでもある。

しかし、また同時に、実父の身辺の詮索あるいは関心というものと矛盾するものでもない。私小説的手法を意識的に排除しつつも、その「フィクション」＝虚構世界が彼の人格を基盤にしか成り立ちえないものである以上、清張作品における「父」の重みもまた、小ゆるぎもしないだろう。むしろ、松本の初期作品は「父」をめぐる回路上に見いだすことがすくなくない。『父系の指』より二年さかのぼる一九五三年——つまり、彼のデビューの年の一〇月に『小説公園』に掲載された『火の記憶』もまた同列に見なしてまちがいがなからう。

『火の記憶』冒頭、結婚を目前にひかえた頼子に、兄貞一から、相手の高村泰雄の父が失踪したままであることについて「故障」が持ち出される。二人は無事結婚するが、泰雄は新婚旅行の予定を変更して、房州の寒村に頼子をさそつて不審を抱かせる。やがて泰雄は、父の失踪は母の不倫に原因があること、幼時から母の行状に不信感をもつて

いて、母の死後相手の男の存在を調べたことなどを告白する。——その告白の末尾、

僕は失踪した父が可哀想でならぬ。それを思うと、母への不信は憎んでも憎み切れぬ。

僕は自分の体内まで不潔な血が流れているような気がして、時々、狂おしくなるのだ。

(35巻・一六五頁)

という一節がある。この小説には、さらに頼子の兄貞一の謎解きによって、どんでん返しがあるのだが、泰雄の告白の内容は、『半生の記』のなかで、父峯太郎が田中家から放逐されたのに「そのへんのくわしい事情は分らない」「その辺のところも分らない」と松本がくり返し、「分らない理由に想像をつけなければいろいろ考えられるところだ」という含みのある言と並置するとよからう。「想像」をつくりごとに置換したひとつの例が、この『火の記憶』であった。

この短篇をおさめる『全集』三五巻の解説に桑原武夫が説明しているように、『火の記憶』は、『小説公園』に掲載されるさらに二年前、つまり『週刊朝日』の懸賞小説『西郷札』が発表された一九五二年(昭和二十七年)、すすめら

れて『三田文学』に書いた習作『記憶』の改稿版であったのであり、「これは加筆といった程度ではなく、むしろ同一題材による改作<sup>注6</sup>」であるという。芥川賞受賞直前の時代の松本にとっての一作品にすぎないものの、その「同一題材」なるものが、かげだし時代の彼に改作をうながす意欲の源泉であることに注目すべきであろう。

『父系の指』の後にも同様に見なしうる作品を見いだすことはむずかしくない。たとえば一九六三年一月『サンデー毎日』に掲載された『暗線』である。

概略はつぎのようなものである。

——「私」の父方の母は、土地の資産家の須地家に嫁しながら、一時離縁されて実家の安積家で「私」の父利一を産んだ。利一は里子に出されたものの、幼時は母の実家に遊びにゆくこともあった。それもまもなく、里子に出された一家とともに遠国にわたったため、実家とは縁が切れてしまう。「私」の祖母が利一をみごもった時、土地には刀剣や鉱山学の権威である三浦健亮博士が調査のために訪れていたことを知った「私」は、利一は須地家の子ではなく、須地家がむかえていた三浦博士が「私」の祖母に通じてできた子と推測する。「私」はさりげなく健亮の孫健庸に会い、「ある感慨が私を捉えて放さ」なかった。しかし、健亮の墓所を訪れてみると、この人のために父が故郷を放た

れ流浪したのだ、と思うと、あらためて憎悪を感じるのだった。――

これもまた「分らない理由に想像をつけ」「いろいろ考えた」ひとつの答案であつたろう。「父」が高名な学者の落とし胤というのはロマン的な幻想ではあるが、とくにこの作品の場合、ラストシーン、三浦博士の墓前で博士の写真を引きちぎる場面には、「父を放たしめたものへの怨念／復讐」が味つけされている。『火の記憶』の高村泰雄の独白に「僕は失踪した父が可哀想でならぬ」は、松本の肉声を帯びてここに共鳴している。「父伝」の作品系列と絡まり合うかたちで「父を放たしめたものへの怨念／復讐」の物語も、隣りあわせて綴られるゆえんである。

### 三 怨念と復讐

『全集』に収められていない松本作品は少なくない。ごく初期の『静雲閣』覚書』もそのひとつである。『火の記憶』と同一年一九五三年の九月『週刊朝日』の別冊「中間読物特集号」に掲載され、一九八〇年六月刊の中公文庫『五十四万石の嘘』に収録されるまで、久しく放置され、忘れられていた短篇である。

――旧大名家榎尾子爵邸であつた旅館「静雲閣」が売却

され、宇津木という男が買い取った。文字どおりの大名商売で斜陽になつた子爵邸を素性の知れない男が買取したのだ。宇津木は旧大名の家臣たちに根ほり葉ほり、この邸で狂死した滝部了介のことをたずねようとするが、みな不快げに黙してしまふ。男があるひとりの女中に問わず語りずるには、現在の当主の祖父・憲明が、家臣の了介の婚約者・雪に通じ、雪が自害したこと、了介がそれを知り憲明に迫つたこと、憲明の側近がその事実を隠匿するために了介を狂人にしたてた、ということだったので。男がこの邸を買収したのは、父の仇だったのである。――

また、これも初期の『尊厳』という短篇。これは『父系の指』と同じ一九五五年九月に『小説公園』に掲載されている。『全集』に収められた際、松本自身の「あとがき」で説明されているように、「実際に起こつた天皇行幸の誤導事件」を題材としたもので、小説では宮様の巡察ということになっている。

――宮様の車を先導するオートバイに乗つた多田警部は、緊張の余りコースをまちがつてしまひ、これを苦にして自殺してしまふ。終戦後、宮様は臣籍降下して室町氏となり斜陽貴族になりはてていた。警部の息子貞一は、この元宮様をかつぎ出して新興宗教をひらき、裏では麻薬の密輸で稼いだ。ある日、警察が貞一を逮捕する。いったん墜ちた

宮様の「尊厳」をふたたび墜とすための貞一の策略だったのだ。しかし、皮肉にも、宮様は二〇余年前の事件については何も知らされていない。――

ここでは、貞一のたくらみは「復讐」と明示されている。「尊厳」もまた「父を放たしめたものへの怨念／復讐」の物語に数えるべき作品である。「それで復讐できたというのであるのか。／室町氏は……自殺した警部のことなど、聞いたこともなかった」という末尾の一節は、「復讐」を空回りさせた、小説のテクニクとしての暗転であるにすぎない。

事件後五〇余年を経た『朝日新聞』一九八五年（昭和六〇）一月四日付朝刊・社会面に連載されていた「それぞれ昭和3」が報じるところでは、

昭和九年十一月十六日。高崎練兵場での陸軍特別大演習観兵式の後、天皇陛下が群馬県桐生市内を視察された。県警察部衛生課勤務の本多重平警部（当時四二）ら二人の警部が、陛下のお車を先導した。

視察順路は「桐生駅↓桐生西小↓桐生高工」とされていた。ところが本田警部の先導車は、左折すべき末広町交差点を間違えて、直進してしまう。順路は途中から「桐生高工↓桐生西小」と、全く逆になった。

「緊張のあまりの過失」とはいえ、前代未聞の事態に、首相、内相、知事らは陛下におわびし、関係者の処分が発展した。

二日後、視察をすまされた陛下のお召し列車が、前橋駅をたつた。合図の花火が打ち上げられた。その瞬間、本多警部は前橋市内の自宅で、ノドを日本刀で突いた。

となっている。清張作品では先導役の「多田警部」は「自殺」したことになるが、『全集』の「あとがき」でも「責任をとって自殺」としているが、これは誤認であるらしく、右の新聞記事はつづけて、

しかし、警部は一命をとりとめた。ひと月後に退院した記事が、小さく新聞に出ている。その後、二十六年間を生きた。

とあり、警部の「世捨て人」として生きたその後のすがた、それを見届けた娘の「父の事件」への思いが記事の中心となっている。これはこれで「父と娘の物語」たりえているのだが、『尊厳』を執筆したころの松本の知るところではなかったろう。当時の報道では、本多警部の家族について

詮索するものはなかったはずである。

『静雲閣』覚書』にせよ『尊厳』にせよ、もともとは「父伝」のかかわりのある題材ではなかった。にもかかわらず、そこに共有する基盤があるのだとすれば、くり返し描かれる「父を放たしめたものへの怨念／復讐」への叙述は、私小説を嫌悪する松本においても、よりなまな心情から噴き出たモチーフと見るほかないであろう。

清張作品の初期の短篇には、低階層者のあがき、圧迫・優越する者への反発・復讐のモチーフに彩られたものがすくなくない。むしろ、そうしたモチーフに衝き動かされて執筆していると思えない様相がある。

『或る「小倉日記」伝』(一九五二年)

『啾々吟』(旧題「啾啾吟」一九五三年)

『断碑』(旧題「風雪断碑」一九五四年)

『笛壺』(一九五五年)

『石の骨』(一九五五年)

『废物』(一九五五年)

などなど。芥川賞受賞作『或る「小倉日記」伝』については贅言を要さないだろう。『啾々吟』は、鍋島藩主の嫡男・家老の嫡男・軽輩の息という三人が同じ場所で同年同月同日に生まれながら、身分立場を異にするためにそれぞれ別の道をあゆまねばならない——とくに軽輩の子は身分ゆ

えに世にむかえられず人に容れられないため、狷介な性格を助長させ、ついには政府の密偵となって自由黨員に暗殺される。——清張の目がこの軽輩の子・石内嘉門にひとときわそそがれていることはいうまでもない。

『平生の記』は、おおかた作家以前の話題で終始し、「あどがき」で簡略にその後にふれる。そのなかで、松本は火野葦平のもとに出入りした際、「北九州の文学好き」の取りまきたちに受け容れられなかったことをいい、木々高太郎の推薦で『三田文学』の同人になりながらも、木々が亡くなると同人をやめた、という。「所詮、どこでもよそ者にすぎなかった」(34巻・八四頁)という松本の詠嘆は、『啾々吟』の石内嘉門の「他人に終生容れられない宿命」(35巻・一一六頁)に転移されているのである。

『断碑』『笛壺』『石の骨』は、松本のこのむ考古学ものだが、中央の学界から疎んじられる者、そこから逸脱した者など、孤独な人物たちが主人公としてえらばれている。

『废物』は、皮肉で一徹だった大久保彦左衛門を主人公として、死の床での述懐に「その依怙地は年をとって、だんだんひどくなくなった。下積みで苛められている者の反抗かも知れぬ」(傍線は引用者の私意。35巻・四七〇頁)とつぶやかせている。評論的なものいいいうならば、松本の内なる怨念が「父」につながる「血」や「歴史」などを借り

て噴出したものといえようか。松本は、みずからの小説観——つくりごとの世界に、自分の主張なり、自分の人生観なり、ものの考え方が入っている、それが小説だ——というのに忠実だったわけである。

#### 四 「父」をめぐる不合理

これまで述べきったつた、松本の作品内に通底する情念は、怨念だとか血だとかいうような手垢のついた語（ことば）よりももっと濃くて深いもののように思える。初期の作品群が書かれ、読者にむかえられたことによつても、彼の「毒おろし」が済んだのではないらしいことは、その後の清張作品を一瞥するだけでもわかる。『半生の記』から『父系の指』『暗線』につながる「父伝」は、一九七〇年一月『潮』のエッセイ『碑の砂』、一九八〇年一月『新潮』に掲載された『骨壺の風景』につながり、さらに晩年の一九九一年二月の『夜が怖い』にまでおよぶのだ。

『碑の砂』は「私の父親の故郷は……」と説き起こし、父峯太郎が長男でありながら里子に出された理由が最近になって親戚からの手紙でわかった、という。

父の祖母に当るひとが嫁と折合いが悪く、離縁させた

というのである。父が里児に出されたのはそのためだった。一応離縁になったのだから、里児とはいっても事実上はもらい児で、松本家が返さなかったのも理屈に合う。父の母の復縁は、その姑が死んでからだったという。実は私は、父の母が離縁されたことにもつと悪い事情を想像していたが、これで安心した。世間によくある例である。（34巻・二三一頁）

さらに松本はつづけて、

父にもし一生コンプレックスのようなものがあつたら、この真相を打ちあけてもらえなかつたためにひとりで空想した「出生の秘密」ではなかつたかと思う。事実、私は、父の里児、その母の離縁という事実から、父の出生に関して暗い想像をめぐらしていたものだ。しかし、田舎の人の長い善意ある沈黙をうらむわけにはゆかない。（同）

と敷衍する。「暗い想像」が『火の記憶』『暗線』などを産んだであろうことはすでに述べた。すなわち『火の記憶』の高村泰雄がいうところ「母への不信」である。それが払拭された、だから「安心した」と松本はいう。しかし、高

村泰雄がいう「僕は失踪した父が可哀想でならぬ」という  
情念は、それでも消えたわけではなかった。

『半生の記』から一五年あまり、エッセイ『碑の砂』か  
らでも一〇年後、『骨壺の風景』に描かれる松本の一族、  
ことに父母については先行の作品と変わりが無い。峯太郎  
とタニがよく夫婦げんかをしたこと、峯太郎が「政治談義  
で、それも明治・大正の有名な政治家の挿話」を「唾を飛  
ばしながら話す」のが好きだったことなども『半生の記』  
と同様である。ここに筆をついやされる中心人物は峯太郎  
の養母、清張の祖母であって、「小倉の寺に預け放しに  
なっている祖母の骨壺が気にな」った松本が、遺骨をひき  
とって両親の墓に合葬することを思い立って、北九州小倉  
を訪れた日の前後を随想ふうに画いているものである。話  
柄上、峯太郎のことを省くわけにはゆかないにしても、く  
り返し「父」を説いて倦まないということは、清張作品を  
読むにあたって、忘れてはならない視座であろう。

松本が没する前々年（一九九〇）の正月号から『文藝春  
秋』に「草の径」の連作を掲載しており、その最後が年を  
越えて平成三年の二月号に載った『夜が怕い』である。こ  
の作を収録した『全集』第六六巻の月報（一九九六年三  
月）には原稿の一枚目の影印が掲載され、「山口啓作は胃  
潰瘍でこの綜合病院の東病棟に二カ月前から入院してい

る」（「綜合」はミセケチ）となっているのに対して、写真  
のキャプションに、

初出時の「山口啓作」が、単行本化の際に「私（原  
口）」と改められ、自伝的色彩が強まった。

と書かれている。というのも、この入院している「私」は、  
医者から胃潰瘍と告げられているが、その実は胃癌である  
ことも承知しており、ある種の達観の境地にある。ベッド  
に横たわりながら眠れない夜を過ごし、身辺の回想をつづ  
けるうちに「父」の思い出にふけることになる。

私の父親は平吉といって七十二歳で死んだ。母親はシ  
マといつて六十七歳で死んだ。父は脳出血、母は腎不  
全だった。母は晩年に呆けてしまい、「あやめ」とい  
う刻み莖を煙管で吸っていたが、マッチの燃えさしの  
軸をいたるところで抛り出すので、いつ大事に至るか  
わからず、油断ができなかった。（66巻・一七六頁）

という挿話が回想の冒頭にあるが、これも『半生の記』の  
「あとがき」に紹介された話とまったく変わらない。

父がどこまでも楽天家であつた一方、母の悲観的な性格は死ぬまで癒らなかつた。……煙管とマッチだけは手ばなすことができなかった。死期が近づいたころは、脳もおかしくなつていて、煙管につけたマッチの火を、その燃える軸のまま、枕元の襖の破れた紙に移した。父が見つけて、「火事じゃ」と叫んだ。……

(34巻・八五頁)

——とすれば、筆が「父」の過去へとさかのぼつてゆくのは、松本にとつて必然である。「父だけがなぜ嬰兒で里子に出されたのだろうか」(66巻・一八〇頁)——と。ここで、ようやくエッセイ『碑の砂』でひとまずの解答をえた松本は、それをここ『夜が怖い』において「一つの想像」として使うことにした。「高井家から嫁にきたユキは木下家の姑と折合いが悪くなつた……ユキは耐えきれずに矢上の家を出奔した」というふうには。

髪をふり乱して夜の山を登り、野を走る。怖くはなかつた。婚家と離れたいとの一心に燃えていた。夫も彼女の心になかつた。舅のことはなおさらである。それでも四時間の夜叉行だつた。星の下か、夜あけの薄明かに、川戸村をとり巻く江の川、八戸川の合流を見

おろしたときはその場にへたりこんだらう。

そのユキが矢上の家に悄然と戻つたのは、彼女は気がつかなくなつたが、最初の子を宿していたからではあるまいか。

そう考えるなら、生れた子がすぐに里子に出された理由もわかるのである。諍いのさなかに腹に入った嫁の子を嫌悪したのは姑にちがいない。……強引に里子に出したのは姑なのだ。ユキにも無断家出のひげめがあつた。いやいやにそれを承知した。

(66巻・一八一頁)

松本の一生をつらぬいた「父」の物語は、かくして一応の結末とともに松本の死によつて閉じられた。しかし、松本は『碑の砂』の謎解きで納得していたのだろうか。『夜が怖い』のいうような嫁と姑の確執であるならば、姑は憎悪の対象は嫁であるはずなので、嫁をしりぞけて跡取りの孫のほうをとるのが「世間によくある例」なのではないか。「諍いのさなかに腹に入った嫁の子を嫌悪」するよりも、「子」はあくまでも跡取り息子の子として家に残し、むしろ諍いのある嫁のほうを「嫌悪」するものではないのか。「生れた子がすぐに里子に出された理由もわかる」とは合理的ではない。「悪い事情」「暗い想像」のほうにこそ

合理性があるように見える。

しかし、いずれにせよ、真実は過去のなかに溶暗し、合理性も不合理も、しよせん想像の世界にすぎない。だからこそ、松本は「わかる」として妥協した体をとったのではなからうか。『碑の砂』で謎解きされたにもかかわらず、『骨壺の風景』『夜が怖い』は、おさまりつかない松本の情念が書かせたものであったと推断せざるをえない。

## 五 水脈の源流

松本清張における父への思いは、『火の記憶』の「僕は失踪した父が可哀想でならぬ」、『夜が怖い』の「亡父を追想していると、なんだか夜の不安も一時的に遠のき、気持ちが沈静して」の文言に端的にあらわされている。

「唾を飛ばしながら」の政治談義や「ふしぎに詳しくかった」歴史知識を聞きつつ成長した松本にとって、青壮年時の鬱屈する時期の関心は、古代史・古代遺跡にむかい、『古代史疑』（中央公論社、一九六八年刊）、『遊古疑考』（新潮社、一九七三年）、『清張通史』シリーズ五冊（講談社、一九七七～一九七九年）を経て『ペルセポリスから飛鳥へ』（日本放送出版協会、一九七九年）その他の一群の古代史ものへおよび、さきふれた『断碑』『笛壺』など

の初期作品をからめて『火の路』（文藝春秋、一九七六年）、『眩人』（中央公論社、一九八〇年）その他の長篇に展開している。

ちなみに、一九八一年（昭和五六）七月に刊行された『十万分の一の偶然』（文藝春秋）は前年三月から八一年二月まで『週刊文春』に連載したものが、連載中のまるまる一号分<sup>注7</sup>すべてを「大麻の季節」と題して、大麻についての知識を開陳しているのが目につく。『火の路』『ペルセポリスから飛鳥へ』や『西海道談綺』（文藝春秋、一九七七年刊）、『白と黒の革命』（文藝春秋、一九七九年刊）等々のイラン—ゾロアスター教—ハシツシユ—ハオマ酒—飛鳥の酒船石と結びついてゆく関心の経路をたどってゆけば、右の古代史ものへと吸収されていってしまう。

本稿冒頭にあげた『史観・宰相論』もまた、清張作品のなかで孤立した分野でないことは周知である。『昭和史発掘』全一三冊（文藝春秋新社・文藝春秋、一九六五～一九七二年刊）はもとより、『象徴の設計』（文藝春秋、一九七六年刊）、『北一輝論』（講談社、同年刊）、初期にも『日本の黒い霧』全三冊（文藝春秋新社、一九六〇～六一年刊）、『現代官僚論』（同、一九六三年刊）などをただちにあげることがができる。清張作品の質量は、全六六巻の『全集』もさることながら、そこからあふれこぼれた作品も半端な数

ではないのだが、複雑・膨大にみえる水脈の源流はひとつなのだ。

\*

ところで、「父」への言及に対して「母」へのその質量は比較にもならない。しかし、その人物像は案外しつかり書き込まれている。『平生の記』の「あとがき」で、楽天家の父に対して「母の悲観的な性格は死ぬまで癒らなかつた」という。

松本の自己言及——たとえば、火野葦平の取りまきにも『三田文学』のグループにも受け容れられなかつたと述懐するところにも、「私を何となく白眼視している様子が見えたので（私の錯覚だろうが）」と書いている、そのカッコ内の但し書きがあるだけに、よけい彼の「悲観的な性格」を読むことができる。カッコ内を書かせる気持ちのなかに、松本自身が自覚するところであつたろう。それよりも何よりも、松本の身体に刻印された「母」の像は、松本自身が言及するところであつた。あの独特の風貌の、「母系の唇」である。

注1 横井「谷崎潤一郎「検印」による略年譜のこころみ」

（『実践国文学』第169号、二〇〇六年三月）、「谷崎潤一

郎「検印」による略年譜のこころみ・補正」（『実践国

文学』第七〇号、二〇〇六年一〇月）。

2 「回想的自叙伝」の旧題で『文芸』誌に一九六三年八月〜一九六五年一月に連載。『平生の記』と改題して河出書房新社より一九六五年五月刊。『全集』第三四卷（文藝春秋、一九七四年二月刊）所収。以下、清張作品の本文引用は『全集』による。

3 丸谷才一「父と子」（『星めがね』集英社、一九七五年一〇月刊）。以下、丸谷の引用は本論による。

4 松本清張・三好行雄Ⅱ対談「社会派推理小説への道程」（『国文学解釈と鑑賞』第四三巻第六号、一九七八年六月）、四一頁。

5 田村栄との対談（田村『続松本清張——その人生と文学』清山社、一九七八年刊）、二二八頁。

6 桑原武夫「解説」（松本清張全集・第三五巻『或る「小倉日記」伝・短篇1』文藝春秋、一九七二年七月刊、所収）、五三三頁。

7 『週刊文春』一九八一年（昭和五六）一月一五日号。

（よこい たかし・実践女子大学教授）